
白&黒

reruka

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白&黒

【Nコード】

N2057F

【作者名】

r e r u k a

【あらすじ】

ミルは黒の組織壊滅を目指す白の組織。親友ラオが黒にいったのをきっかけに白に入った。そのミルの未来は？

CALL 1：黒&白

雨が降るイタリア。

「雨が綺麗だね。でもさやりすぎてない？」

その質問に笑顔でミルが答える。

「そんな事無いですよ。」

ゆっくりゆっくり影は近づいて来るのだ……。

同時刻：日本

崩壊気味の日本。ここは、白の組織日本支部がある東京だ。

「明日！？ミル様とカネデイ様が来日するのですか！？」

「そうみたい。」

適当そうに言う。この人はユウ。ミルと親交が深い。

「日本に黒の組織も来るみたいだしちようどだよ。良かった」
説明しよう。黒の組織は悪い事する人。

白の組織はその人を捕まえたりする人。

「ミルーまだあ？」

カネデイーが聞く。

「さつき飛行機に乗ったばかりです。そんな早い訳ありません。」
するとそこに赤い服を着た老人がやってきた。

「あなたたち白の組織の方ですか？」

こんな人と言ってはなんだがすぐに教えてはいけない。

「失礼ですが、あなたは？」

老人は咳を一つして笑顔で言った。

「私はミハエル「ケーター」です。」

みはえる「ケーター」？あれ？聞いた事あるような？あ！

「あなたがケーターですか！今は変装中ですか？」

白の組織の幹部ミハエルケーター！？

（ちなみに僕は四天王です。四天王はミル、カネデイー、ルクス、

ネイです)

老人の格好ですが21歳。なんだかんだで早く見つけた。そうこ
うしてる間

(結構たつたよ)に日本に着いた。

「ちよっ・ケーター、ミル先行つといて・酔った・うおおえ・」
そういう相手に対してミルは

「まったく飛行機で酔っちゃうなんてー」
とニコニコして言う。

ピリピリ!!

「っ!このふいんきは!クロか!?!」

チッ!何かがする音だ。

「ケーターに、ミル。仕留めがいがあるな」

「・・・!!!!ラオ!」

CALL 1：黒&白（後書き）

後・お楽しみに

CALL 2：ぶつ殺す

ラオ？君は黒に行つてどうなったの？

ラオ？四天王に入る直前に何があったの？

「ラオ、なので今あなたを倒します。」

ほう

ミル？お前は白にいてどうなる？

ミル？あの頃より成長したのか？

「しゃがんでください！ケーター！」

ドガンー！！土？いや壁の爆破音だ。ケーターは？あたりを探すミル。

「ケーター？ケーター！？」

ブツッシャー！血の出る音だ。ケーター！！！！

ミルの叫ぶ声が空港のなか、そしてバス乗り場にも聞こえた。カネデューは何をしてるんだ？

そう思った。

「カネデュー。君もですか？ラオ！カネデューに何をした！？」

え？ケーターはかろうじて生きている中で反応した。カネデューが？何を？

「つつ！デメエー！！」

ケーター！ミルはケーターの再生をホームで見してもらっていたのを思い出した。

ケーター．．．．！そう少し泣きながらケーターを見た。

「では、ケーターはカネデューをやってください。頭にリングがあります。」

それを取ればカネデューは起きるはずです。そしてラオお前は絶対に許しません。

あなたは！ここで僕が！！殺します。」

ラオ！

『装備！スリーアロウス（三つ又矢）！』

ズーン！ドカーン！！

「六道」

ん？グハッ！チッ！

ギギギギギ！何の音？そう思いケーターを見た。

「よそ見注意」

「カツ！」

ブシャー！

血が！カネデイー！お前！！

「テメエらざけんな裏切っつとして仲間にまで手エ出してんじゃねえぞ。」

お前らはここでオレがぶっ殺す。カネデイーお前はもうリングなんか取らない。ここで殺す。

ラオ。お前は2度とオレに面見せんな。つーか今日ここでオレがあなたの腐った面はがしてやる！」

遂に！ミル本気！

同時刻中国

「じゃあ今から私が行ってくるね

ミル！待っててよ 今スグ行くからね」

CALL 2：ぶっ殺す（後書き）

もうすぐ最終話かもしれない
それまでどうぞお付き合いください

CALL 3: missile

『プルルルル』こんなときに電話！？やめてよ！そういった顔のミル。

「ルーマン！そこで見てるのは分かってるんです！少し電話に出てくださいー！」

「はい。ミル様分かりました。」

一瞬のスキだった。

「危ない！」

ガン！

「最後に一発行つとくか？」

「来るなら来い！ラオ！」

ドッカーーン！！！！

「ミ……ミ……ミル？」

カネディーはようやく正気に戻ったようだ。ミルはラオのハンドハンマー大の中にいた。

『オレはどこにいるんだ？中か？』

グッツ！力を入れた。

「hand ballistic missile！」

そうつぶやくと中から閃光のようなものが出てきた。

「もう一発行つとくか？」

さつきラオが言った事をそのまま返すように言う。

「hand ballistic missile！」

そう言うところラオの手は崩れていった。そしてミルはニコツと笑って「右手無くなっちゃったね。」

血は出ていない。元々義手だから。でもまだまだ怒りは収まらない。

「まだ立てるよね。闘らないの？」

余裕？そんな表情で笑う。ラオは石の下に倒れている。ガラッ石をのけたラオは舌打ちをして

「メンデー様、見てますか？これが・・・グツ！」

ミルは足で顔を踏み笑って

「もう終わりかー。リリに来てもらう必要なかったね。」
といい去って行った。

「リリ久しぶり。」

あらという表情でこつちを見た。

「ミル。久しぶり 前までは私の胸の谷間見て鼻血出してたのに
大きな進歩だね。」

ブツ！と水をはいて、

「ゴホッ！いやゴホッ！！お前が見してきたんでしょ？」

でもまあ成長したかな？ミルはそうつぶやいた。

「メンデー様！リリが到着した模様です。これでは
白が！」

「焦るな。じゃあ決戦は1ヶ月後くらいかな？」

リリ。時はやがてくるんだよ。

私がミルの彼女だった時も。まさかあの人白の組織だとは思っても
しなかったし。

リリ。あなたはいずれ私を襲いに来るのかな？

「じゃあ明日。トモとアーヤでミルとリリとケネディー狙いに行っ
て。」

「分かったよ。ボス」

トモは低く落ち着いた声で言った。

「アーヤは？」

「もう分かったって、メンデー。そんなに焦んなくても。」

決戦の準備。

イタリア本部

「じゃあルクスとネイ。ミルと合流して。オレも後で向かうよ。」

「分かったボス。旅先は注意してね。」

ネイがニコツとして答えた。

「はいよー。ティキは？つれてかないの？」

ルクスもテキトーそうに答える

「テキキは私が連れて行きます。」

「日本」

ケネディーの様子がおかしい。

「よくもお前らぁラオを！！！」

ニツと笑ってリリとミルは目を合わせ

「こいつもメンデーの手先ですか・しんどいですね。」

「手加減はいらないね」

CALL3: missile (後書き)

いよいよです第2期も作りたいので；
長いかも

CALL 4：告白？

「ジェットで早くついちゃったね。」

ネイが勢い良く飛び出してくる。

「ネイ！」

「こんな奴相手にしてられなから。ボクの攻撃何か知ってる？」

ん？考えた。魔法か。それでなんだ？

「そう魔法。いまミーちゃんが考えてる事も丸分かり。

だから3週間後にタイムスリップ！」

ヒュウウウウウン！

気分が悪かった。闘ってもないのに；

負けたかんがすごくする。カネデーは多分

「death・member（呪われし5人組）」だろう。ラオも。

リリ。オレは：どうしたらいいんだろうか？なんだろう。このイラ

イラは？

「リリ：あれは勝てない相手だったかな？」

ちよつと泣きそうだ。

「いや。そんなに勝ちたかったの？」

「はい。白を裏切った奴をほつとく程人間出来てませんから。」

ミル。そこまで考えてたの？心の中で思った。

私の中で決意が出来た。ミルが好きなんだ。そう思った。

でもこれは言わない。

「ついたよ・・・？どうしたの？」

はつとした顔でニコツと笑う。

「何でもないですよ。」

ミーちゃん？とした顔。これ以上仲間に心配されたくないミル。

「ネイ。なーに？ミーちゃん？」

「キャラかぶつてませんか？」

へ？生真面目なミルからは予想も出来なかった。

「冗談です。少し冗談を言ってみただけですので。」

「リリ複雑な顔ですね。どうかしました？」

リリは首を横に振った。

「でさネイここで何があんの？」

「・・・」

？ネイに無視されるのは初めてだった。

「ここで1週間！とりあえずトレーニングしておいて。」

「1週間後黒の組織に殴り込みに行く。」

「え！？」

まあ考えてる事は分かった。ここでhand missileを確実に自分のものにする。

そしてまた過去に戻ってトレーニングで磨く。んなところだろう。

「さすがミーちゃんするどい。」

「で？場所は？」

驚きの答えが！

「え？台湾だよ。」

えーーーーーーー！！？

「また飛行機乗るんですか・ネイ；」

リリは深刻だ。告白しようか；

「ねえ？白の組織の人？」

またヤバそうな奴が来たな・ミルはそう思った。

CALL 4：告白？（後書き）

リリだけ変な方向に行ってます。

CALL 5：大決戦！！

ゾクッ！ん？

「乗客の方はすぐにおりてください。」

へえ？なんで？でも降りなきゃならないから降りた。

「東京：じゃん」

羽田空港みたいだ。そうださっきの人は？

「今から、ちよつと廃病院に来て。」

なんで？バスで行こうか。そういう会話をして向かった。

「失礼するよ。」

誰？でも新しい人が入るって言ってたな。

「今日から入ったフォスターです。」

あ！？ガラガラ！！

「！？」

ドツカン！！つぶれた。一瞬にして。

「どーも黒のトモとアーヤです。」

決戦か？フォスター？このために？連れてきたのか？

「今日の僕の武器はこの十字架入りの剣なんです。」

と言ってニコツと笑ってみせた。

すると一瞬にしてトモが剣を振り抜いて見せた。グシャッ！！

「！？」

狙ったのは目か？違う！！狙っているのは・・・腹か？

オレは腕を狙う！！

「フォスター！アーヤはどうですか！？」

「・・・！！！」

何もないのか！？フォスター！無事でいてくれ！！そう願うしかなかった。

ヒュッ！う・・・で！！狙うんだ！！
シッ！！

「狙いは腕か？つくづくカスだな。」

腕？切れただけか！

タラー

「！！！」

出血はひどいみたいだ。でも・・・！？

グッ！？

「目！？目かつ！？」

タラー！！！！目から？でも！？

「ヒュイイイイン！」

ん？未来が見える？

「やつとか。」

なにが？オレらは？

「ボスに生け捕りって言われたじゃん！トモ！」
「てことは！？」

「フォスターもミルもやつちやった。」

「そんな事信じない！！オレは！！！」

CALL 6：死VS記憶

『決心できたかい？』

え？あの街の通りすがったテスラ？

『テレポートで喋れるんだよ。』

くく2日前くく

「寒いな」

2人でそう言う会話をしていた。

ドンツ！

「！？あ、すいません」

人とぶつかってしまった。

「いいですよ。」

その人は早足で去って行ってしまった。あ、ペン落としていつてる。
気づいた時にはもういなかった。

くく今くく

『そういえば元に戻ったんだ。』

え？そうか3週間後に行ってたんだっけ？

でもあれから4週間？戻ってる。

『戻したんですか？』

聞いてみた。彼しか考えられない。

『そう。今は集中しな。じゃあ時を動かすね。』

グサツ！！一瞬の出来事だった。すぐだよ。時を動かして！

「クツ！！ゴハツ！！」

腹？刺された。時間が長いよ。手が動かない。

あれが本当になってしまうのか！？

「フ・・・フォ・・・スタ・・・！」

気づいて振り向いた。

『ドツクン！』

熱い！体が熱い！！

『ドクン!』

もう何も聞こえないや。剣でも持っていてくれ!!

『futureScope!』

見えてくれ!!

『ドクン!』

フォスター————!!!!!!

『ドツ・・』

「ミル?ミル——!!」

泣く声が一帯に広がる。

トモ。なんだこいつは!テメエ!!

「やつちやったな;アーヤ。アーヤ?」

返事がない。

キユウウウウウン!

「!?グアア!」

トモの頭にミルの記憶が流れ込んでいった。あれ?トモは思った。ここ見た事ある。ぼんやり見える白い壁に小さな部屋。そこで一緒にになって笑う友達3人。

「ミル!?おい!なんとか言えよ!」

なんともいえない。死んでいるのだから。フォスター。

「ミル!——」

え?ミルのfutureScopeが反対になって過去を映し出してトモに見せている。なんとか言えよ。

『あなたは僕たちの仲間です。どうしてですか!?』

そっぴいわれたトモは1人で泣いた。

CALL 6：死VS記憶（後書き）

もうすぐ最終話！です多分

CALL7:『ただいま』

「オレは何をしてるんだろう?」

生き返りなんてこの世にはない。

そう思ってた。でもミルは。どうなるんだろう?

あんなに優しくかったミルは?そういう思いが日に日に増していくトモ。

今日1日しか過ごしてないけど優しさが身にしてみたフォスター。

でも、そんな時から半年経った。

ボス戦はなんとか勝ったが、他は惨敗。

死者は両方合わせて1500人以上。

「ミル。久しぶり。」

そこに一人の青年が現れた。

「亡くなり・・・ましたか。」

「失礼ですがあなたは?」

「彼の旧友・・・です。」

futureScopeを使えるようにしたのも彼だし、信用はしてみる。

ミル!そう思ってた泣いた。でも青年は笑っていた。ミルに似た、優しい笑顔だった。

ミル?また泣いた。でもなぜ笑顔でいられるんだろう?

「泣いても死人は生き返りません。なのにあなたは何故泣くんですか?」

笑顔で見送らないんですか?」

何言ってるんだ?そう思った。

「ミラー」フォステル。この方を生き返らしたいか?」

なおさら何を?生き返らせる?寂しい。こんな力に頼ってまで生き返らしたいのか。

でも、この人を!信用したい!オレもまた笑いたい!

「そうです。私の名前はステラ。お見知りおきを。」
ヒュウウウウン！！

「彼に生きたいという思いがあれば生き返ります。しかしなければあなたが死にます。」

ツツ！テメエ！でも心の奥は決心していた。生き返らす。だから。

オレはアイツがいなきや

ならないんだ！そう思った。

「やってください！」

ヒュウウウウウウン！

「頼む！」

キュウウウン

『おまえたいやき食い過ぎですよ。フォスター』

笑いたい。またみんなと生きたい！

『ミル！おかえり。』

『ただいま』

またこの会話がしたい。生きたいです！

「おかえり！ミル！」

「ただいま。みんな」

この会話、この笑顔、みんなが一生の宝物だよ。

CALL7：『ただいま』（後書き）

つづくんですね：

CALL 8：25秒

よく帰ってきた。でもそんなに甘くはなかった。

「ミル。帰ってきてすぐで悪いんだがfuturescopeで明日を見てくれないか？」

いきなり？首をかしげた。でも久しぶりに頼ってもらえた。嬉しかった。

「分かりました。」

シユウウン！

『追撃！A部隊突入！白崩壊！』

な！？

『ユウ！ユウ！！』

オレか？ユウ！！死ぬな！

『死ぬ！ブシャツ！』

フォスター！！

『リー班長！全部隊黒の組織につく前に全滅！』

ふう；

「どうだった？ミル？」

答えたくない。あんな残念な状況。フォスター、ユウが死ぬのを見るために来たんじゃない！

「明日は、この全部隊全滅します。なので、明日は僕に黒を待ち構えさしてください。」

ミル。何言っただ。でも、全滅か。トモ、フォスター、ミル、ネイが四天王の令、この4人で待ち構えてやろうじゃねえか。

「なら、オレも行きます。」

フォスター……。ありがとう。

「っじゃあカスなんか白を渡せないし。オレも」

トモ！ありがとう。

「オレも行きまーす！」

お調子ものだな。半年経つても。

この四人で迎えようか。その朝を。

みんな心配してくれた。でもそれを裏切りたくはない！

「A部隊突入！！」

いけ！！お前ら！四天王とオレの意地見せてやるよ。

バカが！やりあうの？

「クロス・ソード！！」

ヒュウウウン！！

とうとうミルは本気モード！

『やっとか？』

『そうですね。』

黒に勝てる！その自信をつけて向かう。

『f u t u r e S c o p e！』

ヒュウウウン！

あら？見えない？その隙だった。

「首もーらい」

ガシャッ！受け止めた。ツー。だが、血が出ている。

「もう一発！ある！ミル！」

時すでに遅し。

ブッシャー！！

「グッ！！グアアア！！」

重傷か？そんな・・・！！ガラッ！岩からミルが立った。

「25秒で倒します。」

CALL 9：未来

「生きてたんだ」

future Scopeの特殊能力に人の名前が見れるというのがある。

「黙ってください。リケルメ・サーツ」

どうして？名前を知ってるのか？そういう顔だった。

「じゃあ今から25秒で終わらせます。」

よいいドン ネイが早々に相手を倒し、お気楽にそいつた。

「いち」

ガン！剣同士がぶつかった。

「にー」

目がぼやける。グシャッ！髪をつかまれた。

「さーん」

「終わりだ」

「よーん」

ガッ！剣を受け止めた。

『時止めれる？』

「ごー」

『やってあげるよ。』

ピタッ。

『ありがとう。』

ここで殺しても面白くない。

詰んでおこつ。

「ろーく」

「！？」

ん？すでに腹のところに剣があった。
どんな技を？

「さようなら。リケルメ・サーツ」

グシャッ！刺した。6秒でやってしまった。
うわぁ…どうしよう；

「残り19秒他の3人殺します。」

『ドクン』

??心臓の音が聞こえた。

「ゴボッ！」

血が溢れ出してきた。

『ドクン』

あの時と同じ感じ。死ぬのか？

『ドクン』

剣を握った。そして目を刺した。何故か怒った。

あと7秒。

「左目再生。そして進化！！」

その声と同時に目を閉じた。

頭がぼーっとする。意識がないのか？

3秒そのとき剣が伸びた。

「グッシャーー」

その音と同時に3人が倒れた。

「futureScope！」

キユイイイン

『白の組織壊滅状態です。』

「!?!何故だっ!?!」

『迎え撃ったグループのミル様以外全員行方不明です!』

「え？」

『ミル様も左目から大量出血しています。』

なんで？オレだけ助かるの？

『3人到着しました。残りは四天王とユウ様と特殊部隊だけです!』

14人か……。

『グアッ』

「stop! futureScope! This is imp

ossible! I do not believe in the future! Such future I change it!!!」

（やめろ！未来スコープ！こんなありえない！こんな未来信じない！それならオレが未来をかえてやる！）

ミル・・・

「Try to change it. If you do not change it, who changes it?」

（未来を変えてみせる。お前が変えなきゃ誰が変える?」

ステラ・・・

「It is so. I save a friend.」

（そうですね。オレは仲間を救うんだ!）

「It is the spirit! Thus you are good. OK, go! Act violently!」

（その意気だ！お前はそれでいい。行ってこい！暴れてこい！）
オレは未来を変える。時を変えてやる！！

LAST CALL：死崩壊

未来なんか変えられない。いつまでオレはここにいるんだろう？
冷たい土の中、ここは？

「！？黒のボスじゃネエか！？」

慌てた。トモ……。固い！？何が！

「メンデー！？」

グツ！？そう思っただけ血を吐いた。カッ！？
体が熱い。

「未来を変えるなんて、そう簡単にできないよ。ミル」
そう言われてムカついた。こんな奴そう思った。

「メンデー。ちよつとムカつきました。」

ニコツと笑って左目の下を少し触り

『futureScope』

あれ？バグ？

スー！。

「ミル！！その十字架はなんだ！？」

え？そう思った。そして触ってみた。

「It is only you that can
move a curse of the world, and
this cross is a spell of the
world.」

（この世の呪いを解けるのはあなただけです。この十字架はこの世
の呪いです。）

え？呪い？この世の？全世界の？

「うわあつあつあああ！！！！！？？」

『オマエラ、ナニヲシテルンダ？』

Hell doll？地獄の人形？この仕業は？ただ黒と白は対立
してるだけ？

「Hell doll!!!なぜだ!!!なんで・・・。」
『You may use the spell. But there is not the guarantee of your life when a cross became black.』

（あなたは呪いを使ってもいい。ただ十字架が黒くなった時、あなたの命の保証は無くなります。）

「記憶が・・・。Hell dollに殺された人の記憶が。」
くっ!!!!!!

「?」

ぐしゃっ!2度目の腹!?

グツ?

やばい。抜け!!

『ミル。影の首謀者知ってる?実はステラなんだ。メンデー』ステリーが本名』

メン・・・デー!!!

『さよなら。リケルメ』ミラー』

「ステラ!!」

『Hell dollにたよる?』

そうだ!Hell doll!!!でも・・・。

オレは!!

『ドクン』

ははここで終わるか。そう思ったら涙が出てきた。

『ドクン』

さよならみんな・・・。

「フォ・・・スター・・・。」

呪いで。オレは呪いで殺されたのか?

「みんな・・・なあり・・・が・・・と。」

『ドク・・・』

ガタッ

くく2年後く

呪われた世界が崩壊した。未来を悪い方向に変えたのはオレだった。

『こんな世界！！ほろぼしてやる！！』

この一言がHeel doorに伝わり今に至る。

長い呪いの力があけ世界は崩壊した・・・。

LAST CALL：死崩壊（後書き）

最終話。こんな形でした。
また特別編作りますので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2057f/>

白&黒

2010年10月9日03時52分発行